

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4372400954		
法人名	社会福祉法人 熊本東翔会		
事業所名	グループホーム たいめい苑		
所在地	熊本県玉名市岱明町古閑388番地		
自己評価作成日	令和5年10月15日	評価結果市町村報告日	令和5年12月25日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

<p>「認知機能へのアプローチ」に重点を置き、認知機能へ働きかけることで、残存機能を活用し、ADL、IADLの向上を目指し、質の高い生活の実現に努めている。</p> <ul style="list-style-type: none"> 外部での研修がZoom等により再開されており、スキルアップの為に職員に研修の機会を増やしている。 他事業所と連携、情報を共有し、入居申し込みの方の待機期間が短くなるように努めている。 入居者おひとりおひとりを掛け替えのない存在として、ホスピタリティ豊かなケアに努めている。 高齢者介護の三原則を尊重し、主体は入居者であることを常に考えて支援を行っている。

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://search.kaigo-kouhyou-kumamoto.jp/kaigosip/Top.do
----------	---

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

<p>地域に親しまれた事業所では、以前と変りない穏やかで和やかな生活が続いていました。年々介護度が高くなり、複数介助が必要な場面も増えたようですが、「家族と共に支え合う」を基本に担当者会議も家族出席のもと開催されています。家族の高齢化もありますが、入居者と家族共の支援が大事であるとの取組みを行っています。コロナ5類移行後、居室での家族面会も再開し、家族協力により模様替えされた様子も聞かれました。コロナ禍であった間は事業所内で行えることを考え、試行されてきました。近年、入居者からの要望等の表れが難しい状況ではありますが、要望が出れば「海でも山でも連れて行く」と、「覚えている間に」「行ける間に」との思いで実現に取組まれています。</p>
--

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	NPO法人 九州評価機構		
所在地	熊本市中央区神水2丁目5番22号		
訪問調査日	令和5年11月10日		

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)
57	利用者職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、活き活きと働けている (参考項目:11,12)
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	毎月、第1金曜日にグループホーム部会議を開催。参加者全員でケア理念、ケア方針を唱和して運営会議の報告、日々の実践、理念に基づき、日頃のケアの振り返りの場としている。	理念は日頃のケアの基本となっている。事業所職員の会議で唱和することで共有し実践につなげている。	理念は日頃のケアの基本とされており、実践されている様子が窺えます。理念は介護計画の基本であり、介護計画は理念に通じるものと考えます。理念について振り返りの機会作りに期待します。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	民生児童委員の方々と意見交換の場「よりどころ」の開催、馴染みのパーマ屋、移動パン屋、理髪、地域のサロン活動等の交流を行っている。また年2回、地域の公役(草刈り)に参加している。	敷地内の地域交流ホールは住民の利用もよくみられる。今年は認知症カフェも始まり、事業所・法人からの職員配置等、介護相談の場ともなっている。従来より法人全体で地域との関わりに取り組んでいる。	コロナ禍を終え、地域の祭りの練り歩き披露を観覧する姿も聞かれました。入居者の公民館活動・認知症カフェへの参加等の計画もあるようです。実現に期待します。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	第2木曜日には「いきいきふれあい活動」と称して地域の公民館に出向き、脳トレや体操を行っている。また、キャラバンメイトの職員が「命のひと声訓練」に参加している。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	奇数月に開催し、開催月に合わせたテーマで報告をしている。参加者と意見交換や情報の共有の場となっている。コロナウイルスの感染拡大による書面開催も減り、以前のように開催できている。	対面での運営推進会議も再開し、行政・地域等へ直接事業所の取り組みについて報告を行っている。議事録では、地域の声・情報共有・意見交換等が行われている様子を確認できた。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	運営推進会議に玉名市からも参加し、事業所の実情や取り組みを報告している。また、待機者の数や生活の場などの情報共有を行っている。	運営推進会議を機会に日頃の状況や取り組みを報告している。認知症カフェの開催や認知症サポーター養成講座、花種の配布、認知症フォーラムの協力等、行政・地域との連携を行っている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	抑制・拘束・虐待検討委員会に委員として参加し、虐待防止の意識を部内で共有して日々のケアを振り返っている。事業所内で不適切行為とならないように全職員で意識を高め、防止に取り組んでいる。	法人で毎月開催される抑制・拘束・虐待検討委員会へ職員が参加し、事業所で共有している。虐待の芽チェックリストを行っている。懸案事項の提議から対応策の検討も記録されており、接遇マネーチェックシートを用いたラウンド・評価・助言もある。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	グループホームから抑制・拘束・虐待検討委員会に委員として参加している。年間計画で虐待についての勉強会を実施し、理解を深めている。常に虐待に当たらないかを考えながらケアに取り組んでいる。		

グループホーム たいめい苑

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	毎年、4月に権利擁護、成年後見制度についての勉強会を実施している。全職員が理解し、活用できるよう今後も自己研鑽に努める。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約はケアマネジャーが行い、その際に疑問点や気になる事などを伺い、説明している。また要望等は介護計画書に反映させて実行している。改定については書面で説明し、同意書を交わしている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	利用者には日頃から要望等を伺っており、ご家族からは面会時、サービス担当者会議運営推進会議で意見、要望を伺い、ケア、運営に反映させている。また、玄関に意見箱を設置し、意見を聞く体制を取っている。	コロナの5類移行後、段階的に面会受入れを緩和し、現在は居室で家族と過ごす時間が持たれている。「家族と共に支え合う」を基本とし、生活の様子を日頃から家族へ連絡することで意見・要望等を表すことができる関係作りを行っている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	上司による個別面談の実施や部会議等で職員の意見、提案を聞く機会としている。必要に応じては管理部に報告し、さらに会議を重ねて運営に反映させている。	日頃から管理者は職員への声掛けを行っており、職員会議等でも意見・提案が出た際には必要に応じ法人への報告も行われている。年2回の自己評価、個別面談等では職員の思いを汲み、働きやすい職場環境に向けた取組みもある。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	年2回、職員は自己評価を提出し、上司が職員の努力、実績、勤務態度、接遇等を総合的に評価している。事業所全体で働きやすい職場環境に向けて取り組んでいる。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	外部の研修を上司が指名したり、希望を募りして、申し込みを行っている。また、地域活動への参加や部内勉強会を通して自己研鑽、スキルアップの機会としている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	研修会もリモートが多くなり、以前のような交流の機会は減ったが、入居の際の申し込みや調査で訪問した際に意見交換を行ったりしてお互いの苦勞を分かち合っ関係性の構築に繋がっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前に得た情報を基に、入居後に要望、心配事などを伺っている。傾聴することで安心されることも多く、関係性づくりのきっかけとなっている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	申し込みの資料を基に契約の時点からご家族の不安、悩み、課題等を伺い、解決に向けた対話をしている。傾聴することで信頼関係づくりに繋げている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入居前のケアマネジャーからご本人、ご家族の課題や求めている支援を伺い、入居後に自事業所でできる支援を見極めている。必要に応じて早い段階でサービス担当者会議を開催し、支援内容を検討している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	今までの生活歴を把握し、本人ができること、できないことを見極め、生活の中で能力を発揮できる場面を提供することに努めている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	ご家族には契約時に「一緒に支えていきましょう」と声を掛けている。ケアプランにも担当者欄にご家族と記載できるケアを意識し、共に支えていくという関係性を目指している。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	コロナ禍から継続して馴染みのパーマ屋に行かれたり、自宅の仏壇に手を合わせに帰れる方もいる。最近は県外の知人の面会の問い合わせもあり、馴染みの方とのふれあいが始まっている。	年数回の馴染みの美容院利用が続いており、出向いた際には自宅を訪問し、服を入れ替える姿も見られる。コロナ禍で以前のような家族との外出や知人等との関わりは難しい状況が続いたが、少しずつ家族への協力依頼も再開しつつある。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	長く入居されて仲の良い関係性ができていく方が増えてきた。関係性が薄い方には孤立しないように職員が間に入り、橋渡しの役割を果たしている。		

グループホーム たいめい苑

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	同法人の特養に住み替えをされる入居者もいる為、特養の相談員とは情報の共有をし、引き続き、フォローを行っている。ご家族とも関係性は継続している。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	普段の会話の中から思いや希望を聞き出すように努めている。面会や外出もできるようになった為、できる限り、行っている。常に主体は本人ということをお忘れず、ケアプラン作成を行っている。	入居者の思いや意向は日頃の寄り添いの中で把握している。状態変化もあり、思いを表すことが難しい入居者も増えたが、その際には「選択」できるような声掛けを行っている。普段の会話での「困っていることはないか？」からの気づきで介護計画へ繋がっている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	認知症ケアを行う上で生活歴、馴染みの関係、生活環境は重要と捉えており、契約時にもご家族かもアセスメントを行っている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	入居前にはご家族、ケアマネジャー、施設等からアセスメントをし、情報収集を行っている。入居後は日々の生活の中で過ごし方、健康状態、自己資源など把握に努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	3か月毎にモニタリングをし、課題の見直しを行っている。それをケアプラン更新時に反映させている。変化があれば随時、カンファレンスを実施し、家族や他職種の意見、アイデアを取り入れ課題解決に努めている。	3ヶ月毎のモニタリングで振り返り、次の3ヶ月で試行し、その後介護計画の見直しの手順を基本としている。職員との普段の会話や入居者の様子による気づきから課題を得ている。担当者会議は「共に支え合う」を基本に要望・希望・課題を共有する場として家族にも出席頂く。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	入居者のケアに関する気づき、共有すべき情報は日常の記録、申し送りノート、日程表等に記載している。それらの情報をモニタリングやカンファレンスに生かし、ケアプランの作成に反映させている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	画一化したケアプランにならないように本人、家族の要望、状況に柔軟に対応し、今、必要とされるケアになるように努めている。コロナの制限が緩和されたので実現可能なニーズが増えている。		

グループホーム たいめい苑

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	コロナでの制限が緩和されたことで地域に出向いての活動も増えている。また、感染対策をお願いして、ご家族との外出も楽しんで頂いている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	かかりつけ医は契約時に確認し、必要に応じて継続している。かかりつけ医と連携し、必要な医療が受けられる様、情報共有を図り、関係性を気づきながら適切な医療が受けられる支援に努めている。	入居以前のかかりつけ医の継続した受診を支援している。協力医以外の受診は家族と現地で待ち合わせとしている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	入居者に体調の変化があった場合は自事業所の看護師や同法人の看護師と連携し、応急処置や病院受診の必要性を協議し、迅速に対応している。横の連携が取れる体制を取っている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院の場合は当日、または翌日に看護サマリーを病院に提出している。コロナ禍で面会の制限がある為、電話にて情報共有を行い、早期の退院ができる様に連携を取っている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化した場合はご家族に説明し、今後の方針についても話し合いを行う。看取りを希望された場合は自事業所でできることを身元引受人に説明し、ご家族と共に支援に取り組んでいる。	入居者・家族が自然な最期を希望される際には関係機関と協力しながら支援に取り組んでいる。家族によっては毎日来所され、居室で時間を過ごされることもある。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	毎年9月に心肺蘇生や緊急時の対応に備えた勉強会を実施している。また、緊急事態に備えて情報共有、伝達がスムーズにいくように緊急連絡網を整備し、活用している。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回、昼間、夜間想定で避難、通報、消火訓練を実施している。また、停電に備えて発電機や蓄電池の取り扱いについての訓練も行っている。	年2回の避難・通報・消火訓練は入居者も参加し行っている。蓄電池の取扱いは職員皆が使えるよう繰り返し行っている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	毎月の部会の前に参加者で理念の唱和を行い、人格の尊重、尊厳の理解を深めている。たいめい苑では接遇に重きを置き、言葉遣いや敬う気持ちを念頭に置いて入居者に接している。	接遇は毎年研修会のテーマに入れている。今年7月には教育学習接遇委員会と共同で「言葉遣い強化月間」を設け、接遇マナーチェックリストを用い全体で取組んだ。普段の生活では洗濯物(下着)の干し方等にも配慮している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	どのような希望があるのかを日頃の会話の中から引き出し、探っている。自己決定しやすいような声掛けに努めている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	入居者主体を忘れず、ケアに努めている。何事も無理強いせず、本人の思いを大切にしてその人らしい生活が送れるように支援している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	月に1回、出張の理髪があるのでご希望があれば調整し、行っている。馴染みのパーマ屋での髪染めを楽しみにされている方もおられ、必要なら送迎を申し出て頂いている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	現在も汁物は自事業所で調理している為、調理の様子やにおいは伝えることができる。下ごしらえが一緒にできない分、食後の食器拭きやお盆拭きをお願いしており、役割と楽しみとされている。	主・副菜は法人からの配食であるが、摂取量を報告することで体重増減等密に話ができている。今までの「できていたこと」は生活を変えないよう、楽しみとなるように片づけものやお盆拭き等をお願いしている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	毎日、食事量、水分摂取量をチェックしている。お茶、イオン水、牛乳などをお出ししている。食事の摂取量が少ない方にはお菓子やパンを出しており、形状もミキサーや刻んだりし、能力に応じて対応している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、歯磨き、義歯洗浄、うがいと本人に合わせた口腔ケアを行っている。できる方にはご自分でして頂き、必要に応じて介助を行っている。		

グループホーム たいめい苑

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄チェック表をもとに排泄パターンの把握に努め、できる限り、トイレやPTトイレでの排泄を行っている。また、尿量によってサイズを変更し、確認の間隔を変更している。	できるだけトイレでの排泄につながるよう支援を行っている。近年一人介助では難しい入居者も増えた。オムツ等使用の際は話し合いを重ねながらサイズの変更を行っている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排泄を促す為、好みの飲み物や主治医からの緩下剤の処方、毎朝のラジオ体操を行い、規則正しい排泄に努めている。便秘気味の方には汁物にオリーブオイルを小さじ1杯を入れている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	週2回の入浴を基本とし、曜日を決めて行っている。順番は決めておらず、柔軟に対応している。日曜日はフリーとし、必要に応じた入浴を行っている。	週2回午前・午後、曜日を決めての入浴を基本としている。予定日の気分や体調で入浴できない時には日曜日の入浴としている。近年介護度も高くなり、複数介助も増えてきたが、家庭的な雰囲気の中入浴を楽しむことができる支援を行っている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	室温、照明は本人に合わせて調整し、安眠できるように心掛けている。寝具については今までの生活習慣や身体の状態に合わせて布団とベッドで対応している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	内服薬の変更やそれに伴う副作用など注意が必要な場合は二津城の記録に記載し、情報の共有を図っている。また、随時、薬剤師に適宜、相談している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	食器拭きやお盆拭き、洗濯物たたみを役割や楽しみにされている方が多い。玄関先のイスで過ごされる方もおられる。それぞれの能力を活かせる活動を日々、探っている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるよう支援している	制限はあるものの、以前のような活動が少しずつ増えている。昔、よく行った立田山公園やご家族と好きだったラーメンを食べに行かれたり、近所の行きつけの美容室にも行かれている。	コロナの5類移行後、家族協力による外出の機会も増えた。入居者からの要望が出ればできるだけ実現に向け支援を行っている。懐かしい場所を「覚えていた間に」「行ける間に」の思いで支援を行っている。	

グループホーム たいめい苑

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	ご自分で金銭管理をされている方は美容室代や面に来た孫にお小遣いを渡されている。週2回、移動販売のパン屋を利用されている方は自分で選び、支払いまでされている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	電話は希望があれば、自由に掛けることができる環境にある。遠方の方で、ご希望があればZoomによる面会を行っている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	廊下の照明を明るすぎない光量にしたり、居室から廊下の光が気になる方には戸の小窓を塞いだりして配慮している。共有空間には書道や作品等を飾って季節を感じて頂いている。	光・音・温度等、入居者が穏やかに過ごせるような配慮を行っている。廊下には古いミシン等なつかしさをを感じる品物も置かれている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	入居者同士の関係性を考慮し、席を配置している。また、一人になれる空間の席も用意して過ごして頂いている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	認知症ケアで生活の継続性は重要と考えているので、ご自宅で使っていた使い慣れた物、馴染みの物を持ち込んでもらい、グループホームが我が家のように、安心できる場所となるように心掛けている。	入居時に使い慣れた生活用品の持ち込みを依頼しており、入居者それぞれの居室は家族の協力も感じられる設えである。ソファで外を眺める姿があったり、炬燵も見られ、これまでの生活の様子も感じるようである。家族と居室での面会も再開し、模様替え等も見られた。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	入居されて慣れるまでは居室の場所がわかるように表札や居室までの矢印、トイレの表示を設置している。		

2 目 標 達 成 計 画

事業所名 グループホームたいめい苑

作成日 令和 5年 12月 20日

【目標達成計画】

優先順位	項目番号	現状における問題点、課題	目 標	目標達成に向けた具体的な取り組み内容	目標達成に要する期間
1	49	コロナが落ち着いたが、日常的な外出の機会が少ない。	遠出でなくとも、日頃からの外出の機会を増やす。	たいめい苑が開催している「カフェよりどころ」や、公民館活動にお連れする。	1 2ヶ月
2	26	介護計画書での目標達成の振り返りが不十分。	長期目標と短期目標の達成状況の振り返りを行う。	介護計画書の更新時とモニタリング時で目標達成状況を振り返り、介護計画書の作成に反映させる。	1 2ヶ月
3	13	外部の研修会に参加する機会が少ない。	外部の研修会に参加することで認知症介護の知識を深め、スキルアップに繋げる。	認知症サポーター養成講座や地域からの講演依頼にも積極的に参加し、自己研鑽の機会にする。	1 2ヶ月
4					
5					

注1) 項目番号欄には、自己評価項目の番号を記入すること。

注2) 項目数が足りない場合は、行を追加すること。